



第50号

発行
山辺地区社会福祉協議会
事務局
山辺公民館内
TEL 0284(71) 0516

すなおな心 (はい) 反省の心 (すみません) 謙虚な心 (おかげさま)
奉仕の心 (私がします) 感謝の心 (ありがとう) 山辺地区日常五心

第19回 足利市民福祉大会 開催
支えあえる地域づくりを

恒例の足利市民福祉大会が11月9日、市と市社協等7つの福祉団体の主催、10団体の後援でプラザにて開催された。

本市では平成11年に福祉都市宣言がなされ、すべての人が関係機関との連携を深め、ボランティア精神を発揮して、共に支えあえる福祉社会実現に取り組んでいることを確認、本年の大会宣言を採択し、功労者表彰が実施された。

山辺地区としては今回地域福祉関係での市長表彰者は該当者がおられなかったが、市社会福祉協議会会長表彰を次の2名が受賞した。

足利市社会福祉協議会会長表彰

町田照子さん (八幡町) 「地域福祉功労」



いさサロンで最も早い時期に立ち上げ、他地域からも模範とされるサロン運営を実施中。又福祉ボランティアとしても活動中。

足利市社会福祉協議会会長表彰

樋口眞喜子さん (堀込町) 「地域福祉功労」



老人給食ボランティア11年、当初より運営委員や班長を歴任、現在会計として

委員会活動を支えている。

同大会の他分野での山辺地区の受賞者は、老人福祉功労として田中政雄氏が市長表彰を、老人クラブ育成功労として鈴木クニさんが老連会長賞を、ボランティア功労として初谷哲夫氏(四代目堀込小源太)が市社協会長賞を受賞した。

ごども館にて 臼井さん折り紙教室

山辺社協登録ボランティアである八幡町の臼井ヒサエさんは3年前の11月からごども館で折り紙教室を行っている。

9月には児童5名が参加してブーメラン飛行機を折った。臼井さんがゆっくりと丁寧に教え



12月にはひつじを折りました。

ると子供達はすぐに覚え、15分程で出来上がった。一人ずつ飛ばしてみるとブーメランのように戻ってくる。大きい紙や小さい紙を使っても折ってみる。子供達はとても楽しそつだ。毎回30分という短い時間なので難しいものは折れないが、それも教えてみたい、普段は老人施設や老人会等で教えているが、子供達とのふれあいは特に楽しみだと話している。

山辺子育てサロン

毎月第1金曜の午前中、八幡ごども館にて開催中。

平成27年度は

4/10、5/1、6/5、7/3
9/4、10/2、11/6、12/4
2/5、3/4

お待ちしております。

住み慣れた我が家で最期を過ごすには

——在宅医療と課題——
講師 小倉 重人 院長

安足地区民児協研修会(於佐野市)

二〇二五年問題は団塊の世代が75才以上になる(二千万人を超える)ことから生ずる諸問題。医療・介護の側面を捉えても、入院・入所できる率はグッと低くなる。好むと好まざるに拘わらず在宅対応せざるを得ない。ならば国を上げて「在宅医療技術の向上」と「緊急時入院・入所対応の仕組み作り」に注力するしかない。

この観点から医師の立場での現状と課題の講演だったが対象年代の我々には勉強になった。感想を踏まえてレポートする。

まず在宅医療のレベルは機器技術、薬、訪問支援体制等各々の分野での著しい進歩で格段に上がってきているようだ。例えば末期ガンへの自己調節鎮痛法やALSへの人工呼吸法、腹膜透析、腹水穿刺等が可能化されてきている。

しかし在宅医療に安心して自分の身を委ねるには、緊急時には確実に専門医療施設に繋いで貰えるという体制ができていくことが必要だろう。

その為には、専門医療施設(含24時間体制施設)の充実は勿論のこと、そのこと、かかり付け医、ケアマネ、ヘルパー、見守り支援システム、という一対象者を包み込むような地域の連携・ケアシステムが必須である。その中で医者という専門分野はお任せ(繋いでくれる)として、ケアマネから見守りまでの、地域での連携ケアシステムの充

山辺でも在宅ケア・医療の充実へ一歩

山辺矢場川地区 高齢者支援連携協力会議 開く

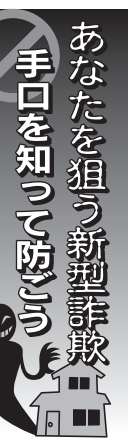
地域連携ケアシステムの構築が、今後の超高齢社会の在宅医療の明暗を決める、と感じられた安足民協研修会から1か月後、地元地域包括支援センター主催で「支援連携協力会議」が2月27日公民館で開催された。正に安足研で指摘された「地域の課題」解決への第一歩の会議の位置づけとなるが、医師(うるしばら院長)と民生委員を交えての会議は初めてであった。(会議の位置付けは数年前より)

実を如何に構築していくかが益々家族同居世帯が少なくなる今後の、在宅医療の明暗を画することになるだろう。

この地域連携ケアシステムを構築していくキーポイント・担い手は、包括支援センターであり民間福祉施設(ケアマネ・ヘルパー)であり民生委員であり究極的には自治会・隣組・両隣である。(おせっかいとおたがいさまと感謝の心)

未来を明るくする答えは即ち、我々自身の心構えにあると感じた。

うるしばら院長からは認知症サポート体制全般について説明があり、特にかかり付け医としての役割を強調され解り易い説明であった。その後市の方針説明があり、連携できた事例について発表とグループ討議があった。どう連携を良くしていくのかについてはまだ手探りの段階だが、「改革は形から」で回を重ねることで具体的連携の実があがってくるものと期待している。



あなたを狙う新型詐欺、手口を知って防ごう

- 自分は大丈夫、と思っている人程、想定外の芝居でコロッと騙されてしまうのが現実の世の中、その為の防止講演会を1月14日に企画した。
- 一、市警察署掘込交番館野所長の講話
- 二、市消費生活センター「虎の子守り隊」の寸劇
- 三、市消費生活センター根岸朋相談員の講演
- 四、DVD「あなたを狙う新型詐欺」の四部構成。

所長のお話は詐欺の種類、被害件数や金額等で圧倒的にふりこめ詐欺が多く被害者は8割が女性であること、等。寸劇は今増えている還付金詐欺を生々しく再現、防げるポイントを強調する名演。講演は、具体例をいくつかあげ、やはり防ぐポイント、工夫を上げてくれた。高齢者でも簡単に離れた家族と通信しあえるタブレットの紹介も参考になった。DVDは被害者の体験談等。こちらをまとめる(次頁へ)



被害者の体験談等。こちらをまとめる(次頁へ)



虎の子守り隊の皆さんです。

(右頁より) だます手口の特徴として、これは大変だと慌てさせるのに「盗られた」「会社の監査が」「警察の捜査が」「税務署の査察が」などが常套句。又、電話をかけさせないために「携帯無くした」「盗られた」「番号変わった」「連絡とれない所にいる」等言い、他の助言をさせないために「人に言わないで」「銀行でなくATMで」等言ってくる。更に近頃の劇場型になると、金の話でないとところから始まり事件が起きて金が、となるので騙され易い。

これから防ぐポイントを列挙してみると、・電話器に「注意」を貼っておく・必ずこちらから今までの電話番号に架けてみる・誰かに相談する。等。

地区全体をまちづくり委員会がまとめている

那珂市を訪問し研修

— 那珂市社協及び額田地区との交流会を実施 —

一昨年の日立市に続いて茨城県的那珂市への訪問を、足利市社協の幹旋で企画した。

茨城県には以前より「地区社協」という位置づけが無く、市社協が自治会レベルに直接行政力で働きかけて福祉施策を遂行していたようだ。

又メインである自治会、自治連をはじめ地域にある組織が細分化されていることは、少子高齢社会に適合し難いことから、県主導で、平成20・21年頃に校区単位の「地域」コミュニティ」制をとって、センター(箱物施設)と助成金と自治権の拡大を付与して、地域諸組織・団体をこの傘下に統合する方向とし、地域内の力ベを無くして横の連携が取り易く住民が自治活動し易い環境を作ってきた。

一昨年訪問交流した日立市の仲町コミュニティもそう、今回の那珂市もコミュニティを「まちづくり委員会」と称しているが、全く同じである。

市社協の地域福祉事業も「ミ

ユニティーの中の福祉部と連携して行われている。

我々の地区と対比すると、コミュニティが地区、福祉部が地区社協ということになる。

2月10日、40名の参加でプラザを出発、例の如くバス車中は交流会の事前研修の場。事務局作成資料で前記の概要や山辺地区実状や活動について行う。更に市社協から参加頂いた中西指導員からも地区支援活動について詳しく話して頂いた。

9時40分には額田交流センターに着。歓迎を受け一休み後早速交流会開始。先方の詳細な説明を拝聴し、当方も若干の報告をさせてもらい質疑応答へ。

参考になった主な点を記すと
・センターは「コミュニティ(まちづくり委員会)の自主管理で、コミュニティが雇用する有給の職員を置いて調整管理している。
・高齢者配食制度は2本立て。市は希望者に有料で週3回届ける。まちづくり委員会では年4回希望者にこれも有料で。見守



那珂市訪問のメンバー

り活動の最先端は当事者が決めるご近所さん。それを社協、民生委員、包括センターがフォローするあんしんねっと事業が定着。東日本大震災前に発足していて本当に良かった由。市には冬のみだが障がい者サロンがありスケーターを育成。等。

当方からの活発な質問が続いて予定時間を15分もオーバー、先方も入ったの記念写真もそこそこに、那珂湊へ向かう。

昼食、買い物を済ませて大洗を回って帰途ついたが、茨城県方式の合理性が今回に至って漸く全体像として掴むことができ、良い研修となった。

再び山辺の歴史を訪ね歩く

世代間交流ふれあいハイキング

4年続いた街中への歴史散策から戻って今年も地元山辺の歴史ふれあいハイキングの企画。

12月7日、柔らかい日差しの中、幼児2人と中学生3人を含み40人が公民館へ集う。この地は大陣の地名が残る足利源氏の縁の地。山辺中教頭先生や公民館長も見送りに来てくれた中、地元で点在するその縁にふれるハイキングへ出発した。

まず八幡宮へ。言わずと知れた源義家に纏わる第一級の史跡。語りつくせぬ詳細は別の機会に譲り、野州山辺駅前へ。今区画整理で激変中だが、西北方面に林が見える。あの辺りが源氏屋敷の跡地らしい。史跡としての証しを未来に残してほしいと思いつつ円満寺へ。

ここは源氏屋敷の鬼門の位置にあつて、というご住職の熱心な講義の説明をお聴きし、苦勞されて修復された不動堂の御宝前、護摩壇、仏具等を拝見させて頂くと、円満寺にもすごい歴史が埋もれているのを感じた。

度重なる渡良瀬川の氾濫等で歴史を明かす資料が失われたことは、本当に残念。「子供の頃の境内が遊び場だったんだ」という一参加者の「こんなになりつぱな所とは知らなかった」の言葉が一堂の感想を代表する。

円満寺から渡良瀬遊歩道へ出て女浅間へお参りし男浅間へ登る。好天に恵まれ、頂上からは360度の大展望が。これも地元の貴重な宝の一つだ。田中2自治会長始め神社役員が、山城であった歴史や富士山信仰、ペタン

「祭りについて語ってくれ。晩秋の陽を受けながら昼食。信仰の場として使われた洞を見学して八雲神社へ



男浅間の頂上にて参加者の面々

「祭りについて語ってくれ。晩秋の陽を受けながら昼食。信仰の場として使われた洞を見学して八雲神社へ

下ると、坂道の途中の住宅の前に、「歓迎、山辺地区社協ふれあいハイキングの皆様、田中町へようこそ」の看板が張り出されてあり、気づいたメンバーが感激してご主人にお礼に伺う一幕も。

八雲神社でも総代の説明を頂き立派な神輿を見せて頂く。更に四所神社へ。体調不調をおして総代が石段下で話してくれる説明を聞き、普段上がらない石段を上がり神社内を見学、裏山の古墳群と共にここでも古い歴史が眠っているのを感じる。

午後2時半には公民館に帰着、参加した高齢者も知らなかった地元の歴史にふれあい、感動し、一緒に参加したこの郷土に育つ中学生達の若い世代にも、この様にしっかり伝えていかななくてはの思いを強くした。

山辺の今昔譚

「龍神の棲むという三栗谷用水」とはどんな川？

前編 (田部井健一氏)

アキレス山辺工場や本庄記念病院の北東側を流れている川を三栗谷用水という。下水路ではなく用水路である。

古来より山辺地区をはじめとして渡良瀬河南地区の産業は米作りが中心で水田が広がっていた。その広大な水田を潤す為に三栗谷用水は約400年前(安土桃山時代)に造られたという。現太田市市場先の渡良瀬川に堰を設け取水し、山辺地区をはじめ下流地区の水田へ配水していた。

しかし渡良瀬川上流の降水量の減少により十分な取水ができず、度々干害が起こった。加えて明治中期、足尾銅鉱業の隆盛に伴い、渡良瀬川に流失した鉱毒が水田に流れ入り、稲の生育に多大な害を及ぼした。それは根の部分に銅分が集積し、成長を阻む害であった。このように農家の方々は干害と鉱毒の害に長年苦しんでおり、米作りに欠かせない十分な取水と鉱毒を含まないきれいな水の確保は人々の悲願であった。

昭和13年、河南地区(山辺・御厨・梁田・筑波・久野)の農家が水利組合を結成し、国・県に働きかけ、水路の大改良工事が着手された。その工事は当時としては国の模範となる改良工事だった。どんな工事でどんな成果があつたのかは次号にて。